

「あの頃、そして今…」

須永克彦



1970年代は、別役実氏、あの世へ逝かれた井上ひさし氏、やはり故人となられたつかこうへい氏によって演劇界はリードされていた。電柱一本しかない演劇空間で不条理の世界を展開された別役氏は、兵庫県立ピッコロ劇団の代表として県の文化行政の一翼を担われていた。一昨年7月、所用で上京の節、偶然、井上ひさし氏とお会いし、信号を渡る横断歩道のど真ん中で、前年上海で上演させて頂いた「父と暮せば」のお礼を申し上げ和やかにお別れした。私たち道化座は別役作品も井上作品も随分上演させて頂いた。両氏には謹んで感謝申し上げたい。

また、当時思い出深いのは若者演劇のリーダーとして日本演劇を一躍席卷、惜しくも逝去されたつかこうへい氏だ。彼の著名な作品「熱海殺人事件」は、日本演劇界の歴史に残るだろう。1973年、道化座が彼の「戦争で死ねなかったお父さんのために」を上演していた元町柳筋の稽古場へ、友人を訪ね、神戸の鈴蘭台にいた彼がひょっこりのぞきにやって来た。彼は大学ノートに横書きした「熱海殺人事件」を楽しく説明し、さらに私に出演を依頼、積極的に東京に連れ出してくれた。1975年秋、私は木村伝兵衛役で青山のVAN99ホールの舞台に立った。彼の演劇作法は真に新鮮だった。所謂、口立て芝居というもので、彼が言う台詞をその場で覚え、それを即座に繰り返すという新鮮さだ。出来上がったその作品は熱狂的に若者達に受け入れられ、劇場を取り巻く数十列の観客がVAN99ホールを鈴なりの超満員にした。私はその熱く新鮮な演劇をこの身で体験できた一人だった。この新しさに演劇的五感を醒まされた。

三氏以外にも赤 TENT で上演した状況劇場の唐十郎氏、黒 TENT の佐藤信氏、劇作の清水邦夫氏や演出の蜷川幸雄氏がいる。蜷川氏とは、彼が俳優の頃、大阪のNHKでよく一緒に出演した。その後、演出家として大成された。東京は若い演劇の花盛りだった。

東京で受けた刺激に発奮、私は神戸に戻り、この身に記憶した熱い演劇体験を抛り所に、1971年から開始していたスタジオでの【のいえノイエ】公演で、つかこうへい作品、別役実作品、井上ひさし作品、清水邦夫作品、佐藤信作品、唐十郎作品、寺山修司作品、金杉忠男作品、石沢富子作品、竹内統一郎作品、北村想作品などなど、質より量を自負しながら日本の現代演劇作品を数々上演した。



「カンカン人生」

1973年、中村茂隆氏(神戸大学名誉教授)の企画と音楽により、釜ヶ先の詩人・東淵修氏の「すっぱだかのまち」を【のいえノイエ】で上演した。これは一人芝居「カンカン人生」として、国内はもちろん、独角劇「我這一輩子(我が半生)」として、北京・天津・南京・上海・杭州の各地で上演し、公演回数は200回を超え、私のライフワークとなる。当時、中国にはまだ一人芝居という演劇スタイルはなく、1987年、道化座「カンカン人生」初訪中公演の数年後に、南京で一人芝居コンクールが行われた。少なからず彼の国の現代劇に影響を与えたようだ。

これ以降、私の劇作名は渡辺鶴（わたなべ かく）となる。父の名前「鶴松」の「鶴」の1字をいただいた。1990年には〈幸福〉シリーズ「幸福」「幸福の条件」「幸福のゆくえ」を劇作、3作は今も上演し続けている。「幸福」は6度の訪中公演を行い、韓国やマレーシアでも上演した。一昨年、劇作家協会の招きで東京の座・高円寺で上演した時には、坂手洋二会長に「20年前に書いた作品とは思えない!」と言われた。昨年、市内の中学で「幸せのゆくえ」（“幸福のゆくえ”より改題）を上演し、思春期の彼、彼女たちが熱心に観劇してくれた。嬉しいことだ。これらの作品を書く上で、何よりも大切に思ったことがある。それは私たちの普段の生活をベースに描くこと。地元に関根を張った市民の為の演劇、つまり『神戸での市民演劇!』を旗印に掲げた。題材は誰にでも分かりやすい日常生活の演劇化が目標である。その初心は現在も持続している。

そして1995年の震災体験は、神戸を舞台に創作劇《生きる》、新《生きる》、《ともに生きる》の3シリーズ18作品の上演に繋がり、現在のシリーズ《家族》へと続く。

私の演劇人生の根底には震災と戦災の恐怖心がある。大地が揺れる自身も怖い、火の粉を振り払い母と逃げ惑った幼い頃の戦争体験は忘れられない。そんな思いが国内に留まらずアジアの国々との交流に駆り立てる。日本とアジアの国々のそれぞれの立場……政治の世界はともかく、文化を通しての草の根交流は戦前、戦後の時を越え、絶えることなく続いている。

2000年に道化座が中心となって民間による演劇文化交流《アジア演劇祭in関西》を立ち上げた。海外演劇、特にアジアの演劇に触れる機会がなかった関西での日中韓3カ国による現代劇の祭典だ。

2000年～2004年、中国は北京の中央実験話劇院（現・中国国家話劇院）「親爺とパパ」、上海話劇芸術センター「去年冬天」「カプチーノ」、鉄路文工団話劇団「お元気ですか?」、韓国は劇団美学「Abi（親父）」、木花レパートリーカンパニー「春風の妻」「自転車」、ソウル市劇団「讓寧大君」、実験劇場「黒いゴム靴」が来日、アジアの多彩な演劇を披露した。

この事業は、2005年より上海話劇芸術センターが《亜洲当代戯劇季》として引き継ぎ、現在は規模を拡大し《上海国際当代戯劇季》となり、私はその名誉会長を仰せつかった。今や、日中韓はもちろん、世界中から演劇人が集う演劇祭に成長した。この5年間に道化座「幸福」「人生感受」「父と暮せば」「オハヨウ、母さん!!」、日・中・韓芸術文化の架け橋関西実行委員会「母」、ニットキャップシアター「男亡者の泣きぬるところ」、劇団五期会「マイ・ガーデン」が上海での演劇祭に参加した。また関西でも、2007年に上海との同時開催で、中国から上海話劇芸術センター「活性炭」と香港戯劇協会「金池塘（Golden Pond）」、韓国から劇団自由「クツパ」とペウセサン「One Week」が来日公演した。

最近、私は韓国のテレビドラマ「風の絵師」を拝見している。朝鮮にまだ皇帝が居られた時代、朝鮮画の師匠檀園と愛弟子慧園との絵画を通しての愛の物語だ。作中、弟子慧園の言葉に「教えていただいた師匠の手は温かい。これは愛の心がこもった人間の手です。私はこの愛を頂いて人間を描かなければならない」と語る。まさに文化に必要なのはこの『愛の心』なのだ。私は、その『愛の心』を持って、今日も神戸の演劇界に我が身を置く。

人々の普通の暮らしを描いた道化座の創作劇……昨秋、劇団道化座は「華やかなアジア」をテーマに北京で開催された国家事業《中国国家話劇院戯劇季》に日本代表として「オハヨウ、母さん!!」を上演した。日本からはこれが初めての参加だ。全国に数多くある中から“日本国・神戸の道化座”と名指しでご招請頂いたのだ。光栄の限りだ。

神戸を舞台に描くことは、自らのアイデンティティーに立脚したナショナリズムであり、一地域の芸術に留まらず、世界に通じるインターナショナルな演劇創造であると確信し、今後も親しみのある演劇を追求していきたいと思う。今後とも、どうぞ、よろしくご支援をお願いします。